

## 【64 例目】群馬県（前橋市）における 豚熱の患畜確認農場の現地調査概要

拡大豚熱疫学調査チームによる現地調査の概要は以下のとおり。

### （１）農場の概況

- ① 当該農場は、丘陵地の麓に位置する一貫経営農場であり、農場の周辺は雑木林に囲まれていた。
- ② 農場周辺では野生イノシシの生息が多数確認されており、昨年11月から今年1月にかけて、農場から半径約2.0km圏内の4地点で野生イノシシの感染が確認されていた。

### （２）飼養衛生管理関係

- ① 飼養管理者は農場専用の長靴、作業着に着替えていた。飼養豚は各ステージごとに専任の作業着がいた。豚舎に入る際は、各豚舎専用の長靴に交換し、踏み込み消毒を行っていたが、作業着及び手袋の交換、手指消毒は実施していなかった。
- ② 飼料や豚の輸送車両が農場に入る際には、農場入口の動力噴霧器で車両消毒を行い、農場が用意した長靴と手袋、作業着を着用していた。
- ③ 豚を豚舎間で移動する際は、降雨後は通路消毒していたが、母豚の移動毎には通路消毒せずに直接場内を歩かせていた。子豚は金属製のコンテナに入れフォークリフトで運んでいたが、汚れが付着している場合に洗浄、消毒はしていたが、移動毎のコンテナの洗浄・消毒は実施していなかった。
- ④ 飼料は、配合飼料を給与しており、食品循環資源は使用していなかった。
- ⑤ 農場ではパイプラインで自動給餌していた。一部の豚舎で豚舎外から給餌車で飼料を搬入していたが、給餌車が豚舎を出入りする際、洗浄・消毒は実施していなかった。
- ⑥ 飼養豚への給与水は、井戸水を消毒せずに使用していた。（年に1回外部検査機関で水質検査をし、水質を確認の上使用していた。井戸水は密閉タンクに入れられていた。）
- ⑦ 糞は、農場内のコンポストにて処理していた。死亡豚は、子豚

はコンポストに投入し、肥育豚や母豚は系列農場に輸送した後、業者が回収していた。

- ⑧ 堆肥は、自社所有の畑や系列農場に搬出していた。

### (3) 野生動物関連

- ① 衛生管理区域の周囲には、金網フェンスが設置されており、農場出入口には門が設置されていた。
- ② 飼養管理者によれば、農場周辺ではイノシシやシカが目撃されることがあるとのこと。また、農場敷地内では、ネコ、カラス等の野生動物が確認されていたとのこと。ネコの対策としてワナを設置、また、見かけたときは捕獲し衛生管理区域外へ出していた。
- ③ 発生豚舎はセミウインドレス豚舎で、壁面のロールアップカーテンは発生時期には締め切っていたとのこと。

### (4) 臨床症状の経過

- ① 当該農場では令和2年1月に初回の豚熱ワクチン接種が実施されており、その後、継続的に豚熱ワクチン接種が実施されていた。
- ② 本年3月10日に発生豚舎の一区画で5頭の死亡が確認された。当該区画の過去1カ月の死亡頭数は1~3頭であったが、管理責任者によると、当該区画は換気が悪いことから平時より豚が調子を崩しやすく、過去にも同程度の死亡頭数が認められたこともあることから、通報には至らなかったとのこと。
- ③ 3月15日に管理獣医師が発生豚舎に立入りした際には、いくつかの豚房で腹式呼吸や活力低下が認められたが、3月11日~15日までの死亡頭数は0~1頭と落ち着いていたことから、回復傾向にあると判断していたとのこと。
- ④ 3月16日から3月29日までに、発生豚舎で、神経症状や腹式呼吸が認められ、一区画で2頭~12頭の死亡増加が認められたが、管理責任者によると、過去にPRRSやレンサ球菌症が発生した際にも、似たような症状や同程度の死亡が認められたことから、通報には至らなかったとのこと。
- ⑤ 3月30日に発生豚舎で6頭死亡。農場責任者が当該豚舎の直

近1週間の死亡頭数を確認したところ、過去のPRRS発生時の死亡頭数のピークを上回っていたことから、過去に発生した疾病ではないのではと考えるようになり、3月31日に管理獣医師が来場予定であったことから、その際に相談することとしたとのこと。

- ⑥ 3月31日に発生豚舎で13頭死亡。管理獣医師が当該豚舎に立入りしたところ、チアノーゼや活力低下、パイルアップ等が認められた。確認が夜であったことから、翌4月1日に管理獣医師が剖検したところ、豚熱を疑う所見が認められたことから家畜保健衛生所に通報した。
- ⑦ 調査時には、発生豚舎及び同じロットの移動先の肥育豚舎では、死亡、活力低下等が認められたが、当該豚舎以外では異常は認められなかった。

(以上)